

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	父：詩歌
Author(s)	久保田，能照
Citation	龍南， 2 0 3： 7 8 - 7 9
Issue date	1927-12-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8971
Right	

筆による表現は

うちほがした、底なし井戸の廣袤を見ないか
そらおそろしくならないか

さかしまな人間が早わかりに、「無限」と銘うつた
君

「空間」は無限なりと言つてみい。

君の頭の中の「空間」は限られた小さなものよ

僕は「空間」をある時追つたよ。

ずんずん追つたよ。

もうつきとめたと思つて止つたよ。

ところがその先もやつぱり無限だつた。

父

夏休が、刻々わたしを追ひかけて、追ひつめた今日
わたしは父の頭髪あたまをつむ。

ギチギチを進むバリカンの下、老の眼瞼はつむる
斑白の頭は、心よげに、

ゆらり／＼動く。——小兒の様に純真に自然だ。

わたしは思はず暗然となつた。

六十年の風雪に、あてられた父は私の前に

いま何と言ふ従順さだ。安らかさだ。

わたしは親と子の因縁のいみじさを思ふ。

いまこそ、私は人間ひとの世の寂しみを感ずる。

「脳髓のうずいの上の所を、血の出るまで引っかけ」

父よ重いでせう……………。

さしも明析を誇つた頭。

こどしかつた人生の旅路を思ふ。

「他人ひとの脳髓を借つて居る氣はしませんか……………」。

……………だが……………だが……………。

父の存在は、そのまゝ、私にありがたい。